

短歌　―秋晴れ―

土田 舞山

昭和からの伝言継ぎて戦没の数多あまたのみ霊永久とわに護らむ

秋晴れの銀杏の広場一斉に黄金に染めて四季遷り行く

15台風停電、豪雨容赦なし対策遅れて惨状極わまる

限られたこの身にあれど大袈裟な年金亡国とまどいて聞く

卒寿こえ友の言葉に励まされ元氣もらった無邪氣に嗤う

故郷のカラス珍しブラジルの叔父カメラを握り暫し動かず

血圧が下がったよと子らに言い又も懲りずにパソコンたたく

定年や資産崩すか働くか、すかさずに働け働け子らは励ます

命いっぱい咲くからに手を触れてみたくもなりぬ高砂の百合

ちちははを貧しきままに逝かしめて何ぞ歌詠むやさしき歌を